



質疑応答（第2分科会）

和田 恵 氏（立教大学 博士課程）	……	P. 1
小島 道生 氏（筑波大学 准教授）	……	P. 2
川合 紀宗 氏（広島大学大学院 教授）	……	P. 3
実吉 綾子 氏（帝京大学 准教授）	……	P. 5
遠藤 洋二 氏（関西福祉科学大学 教授）	……	P. 8

※ご質疑・ご意見をお受けしたものに対し、ご回答を掲載いたしております（時間都合で未回答となった分を含む）。

発表者

和田 恵 氏（立教大学 博士課程）

ご質問

- 文脈分析課題の介入について7セッションをどの程度の期間で実施されたのでしょうか？
- また、関与者が異なっている場合、セッションを実施していく上での実践力や経験等に被験者への介入した結果の影響はないと考えてよろしいでしょうか？
- また、今後、どのような場所で実践することが期待されると考えられますか

ご回答

ご質問いただきありがとうございます。

文脈分析課題の7セッションは、課題を実施にご協力いただく施設や研究参加者の方々のご都合を考慮しながら、平均して2週間に1回程度、かつ7セッション終了までに3カ月程度の期間を設定して実施いたしました。

複数の関与者に課題の実施を担当いただいた際には、研究代表者（和田）が直接課題の実施方法を説明し、規定の手続き以上に教示を入れたり、回答の促しを入れたりすることなく、児童から得られた反応をありのまま記録いただくように指導を行いました。これによって、課題の実施者が異なっても、得られる結果に偏りが生じることのないよう、注意を払いました。

高機能自閉症児の社会的コミュニケーション支援においては様々な試みが行われており、暗黙の了解を明示的に教えるソーシャル・ストーリーやソーシャル・シンキングなどのアプローチが取り入れられてきています。そのような流れを汲む手法のひとつとして、研究上においても、臨床発達心理支援の現場においても、広い枠組みで能動的に社会的文脈を読み取る練習などに用いていただけることを目指して、改良を続けております。

支援を受ける本人が実際に社会的やり取りを経験して知識やスキルを得ることは勿論のこと、認知的な枠組み（心構え）を入れることが得意なお子さんの場合には、必要に応じて文脈分析課題を取り入れていただくことで、社会的に意味を持つ情報への着目や、それらの整理・文脈の理解に繋がられるものと考えております。

発表者

小島 道生 氏（筑波大学 准教授）

ご質問

○ご報告いただいた最後のスライドの「4）必要な子どもには、事前にゲームのお題、内容を予め伝える」とありますが、この「必要な子ども」とはどのような子どもなのでしょう。

ご回答

ご質問ありがとうございます。

子どもの中には、予めどのようなゲームを行うか見通しがもてた方が、安心して参加しやすくなる子どもがいました。そのような子どもを指しています。

発表者

川合 紀宗 氏（広島大学大学院 教授）

ご質問

（ご意見）

- インクルーシブ教育（特別支援学級経営を中心に考えて）の問題の多くは、教員数増加により、解決の方向に動く私の知る範囲では感じているところです。つまり、予算や支援学級の定数、定数に占める障がいの多様化・重度化が大きな問題〔少人数、特に一人の担任で8名（最大）に対応しきれない〕となっています。
- これは、専門性を高めた教員であればあるほど、そのジレンマに苦しむこととなります。そうした教育のシステム（定員）上の課題は、川合先生のご研究の「外」であるかもしれませんが、折にふれ、情報を発信して下さいますと現職として幸いに存じます。

ご回答

ご意見ありがとうございます。

教員定数の少なさは日本では常に課題です。教員定数が増えることにより、それだけ少人数の児童生徒に対してより丁寧に目を向けやすくなりますので、インクルーシブ教育がさらに推進される可能性は高いです。

一方で、先生方の専門性をどう高めるかについても同時に検討が必要です。長年巡回相談指導を行う中で、少人数の通常の学級や1人しか児童生徒が在籍していない特別支援学級の担任の先生方が指導に困っておられるケースも少なからず目の当たりにしてきました。

また、通常の学級、特別支援学級、通級による指導では、特別支援学校教諭の専門性ではカバーできない障害（言語障害、情緒障害、発達障害など）のある児童生徒を支援することがあり、こうした障害種については、特別支援学校教員養成課程においても十分な数の授業もなく、これらの障害に対して高い専門性を有する教員がきちんと要請されていない状況が長年続いています。近年、すべての種類の教員免許状の取得を希望する学生に対して、特別支援教育の基盤的知識を授業で得ることが義務付けられましたが、1つの授業のみで、学生に特別支援教育についての専門性を身につけることは困難です。

インクルーシブ教育システムを推進するには、教員定数枠の拡大と専門性の向上の両輪が必要となるでしょう。

（次葉に続く）

ご回答（続き）

また、専門性向上のためには、教員養成段階の学生・現職の先生方ともに、特別な支援が必要な児童生徒の実態把握や支援の在り方、困りについて相談し合えるケース会議（特に学生の場合は疑似ケースで可）をもち、児童生徒への支援に対する自信をスキルを高めるとともに、PDCAサイクルにより、支援効果と課題を定期的に検証し、さらに良い支援の在り方を検討していくことで、実践知を高めることも重要と考えます。

さらに、各学校で特別支援教育を推進する特別支援教育コーディネーター（特支Co.）や特別支援教育支援員の専門性の向上や、特支Co.の悩みや困りの相談相手となる更なる高度専門職との定期的な研修や会合を持つ機会を設定することも重要でしょう。

一方、国としては、幼稚園・小学校・中学校・高等学校等に勤務する特支Co.の専任化や、学級編成及び教職員定数の標準の改善、通級による指導担当者の定数枠拡大に必要となる予算の確保、教員養成課程における教科及び教科の指導法に関する科目や領域および保育内容の指導法に関する科目で特別な支援の必要な幼児児童生徒に対する指導支援に関する内容を取り扱うことの義務化などを行う必要があると思いますし、地方自治体としては、インクルーシブ教育システムの更なる推進を目指した継続的な研修機会の確保やインクルーシブ教育システム推進モデル校の設置、巡回相談指導のさらなる充実、特別支援学級担任や通級による指導担当者になることを希望する専門性の高い教員候補者を確保できるような採用試験の在り方の工夫などが求められるでしょう。

発表者

實吉 綾子 氏（帝京大学 准教授）

ご質問

○貴重な研究報告ありがとうございました。
ひらがなや漢字を覚える際に視力や眼球運動の影響についてお聞かせください。

ご回答

ご質問ありがとうございました。

発達性読み書き障害の定義としては、視力等には問題がないが読み書きが難しいということで、より視覚の情報処理の高次な機能の問題と考えられます。

また、眼球運動については、注意をどう向けるかなど、認識のレベルから制御しているとも考えられ、発達性読み書き障害との関連も指摘されてはいます。

ひらがなや漢字を覚える際には、まず情報の入力として文字の形が正しく知覚される必要があります。視力や眼球運動に問題があると、この入力の情報そのものが損なわれてしまうので、読み書きに困難感がある場合には、まずはそのような視覚の問題がないかも確認する必要があります。

発表者

實吉 綾子 氏（帝京大学 准教授）

ご質問

- 實吉先生のご研究、非常に興味深く拝聴いたしました。
現場において、文字の習得については、日常的に話題になることであります。
時に、小学校高学年においても、ひらがなの鏡文字が表出することがあります。
また、漢字において、横画やたて画が多いときに誤って表出すること（※）が
日常茶飯になっている児童もいます。
- そういった児童への「アプリ」は、より微細になるのでは…と予想いたしますが、
ぜひ研究を進めてくださいますと、児童の助けとなる成果（アプリ）のご発表を
お願いいたします。

《※の例》

達 } 横3本の
はずが… → 達 } 横2本
になる

ご回答

ご質問ありがとうございます。
また、実際に教育現場におられる先生のご意見、ご感想は大変ありがたいです。

今回のアプリは主に未就学のまだ文字の学習を始めたばかりというお子さんを対象
にして開発、検証しております。

今後、小学生以上で問題になる漢字の読み書きにおいても、今回の結果と同様の認
知能力（質的な空間関係認知など）が必要となるのかどうかを検証したいと考えて
おります。ひらがたと漢字は、認知処理が異なり、その神経基盤（脳の中でどのよ
うに処理されているのか）も異なることが報告されています。漢字の学習にも対応
できるようにアプリを更新していきたいと考えています。

発表者

實吉 綾子 氏（帝京大学 准教授）

ご質問

（ご意見）

○質問ではありませんが、小学生の実験参加者が小1～小6となっているので、効果がみられなかったのは、そのどこかに臨界期があるのかも知れないと思いました。

ご回答

ご意見ありがとうございます。

はい、ご指摘の通り小1から小6では学年によって成績は様々でした。実験3では参加者が少ないためにまとめたの分析になってしまいましたが、小学校3,4年生くらいを境に誤答率が下がったりしています。

空間関係情報や左右の認知などが安定するのが7、8歳頃といわれておりますので（Piage, 1928など）、その辺りが反映しているのかと思います。

今後、人数を増やすなどして詳細に見ていくことができればと思います。

発表者

遠藤 洋二 氏（関西福祉科学大学 教授）

ご質問

○地域での孤立が、児童間性暴力にどのように影響しているのでしょうか。
ご教示いただければ、幸いです。

ご回答

ご質問ありがとうございます。

地域社会からの孤立は施設の閉鎖性につながり（逆も言えますが）、施設集団の中で隠されたルール（Hidden Agenda）を生み出します。例えば、「単なる遊びや冗談」といった文脈で、男性から男性への性暴力を容認したり、強化する施設のシステムが固定化されることも稀ではありません。